

2011 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 13:35～15:05 90分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、電算処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(25点)

「社会について考えることは大切だ」。

「社会的な視点から、社会的な問題に関心をもたなくてはならない」。

「自分のことだけでなく、社会のことも考えなくては……」。

私たちは子どものころから、こうした言葉を繰り返し聞かされてきた。親や教師はもちろん、テレビや新聞で社会について解説する学者や文化人、「社会的な視点」から発言するタレントや芸能人、政治家や企業経営者から近所や親戚せきの人びとにまで、社会について考えることの大切さを、入れ代わり立ち代わり説かれ続けてきた。

国語の作文や社会科のレポート、入試の小論文や就職の面接などで、こうした「社会への関心」や「社会的視点」が必要とされるのは言うまでもない。社会について考えること、社会的な視点をもち、社会的な問題に関心をもつことは、私たちが生きるこの社会では「正しいこと」「必要なこと」であるようだ。

だが、なぜ社会について考えなくてはならないのだろうか？

ひとつのありうる答え。それは、人間は一人ひとりで生きているのではなく、社会の中で他の人びととともに生きているから、というものだ。君は一人では生きていけない。君の存在は両親、友人、地域の人びとをはじめとするたくさんの人びとの営みの中で始めて可能になるのだし、君もまたそうした人びとの中で一定の役割を果たしうるのだ。そのためにも社会について知り、考え、社会に対する自覚と責任をもつことが大切だ、というわけだ。

この答えは間違っていない、「正しい答え」である。

だがしかし、「正しいこと」や「正しい答え」がいつも、「この私」にとつてリアルで腑(1)ぶに落ちる答えというわけではない。確かに私は一人(＝独り)では生きていない。私を含めたたくさんの人間がいる中で、私を含むさまざまな人間の営みが「社会」と呼ばれる広がりを作り出し、そこでいろいろな問題が起こってもいる。それはそのとおりだ。けれども、だからといって「社

会のこと」、たとえば少年犯罪や少子高齢化や第三世界の貧困や地球規模での環境破壊についてあなたも考え、そのことに一定の責任と自覚をもつべきだと、いきなり言われたらどうだろう。「そうかもしれないけれど、それはちよつと……」と言う人は、けっして少数派ではないだろう。

私もまたそのように言われたならば、「それはちよつと……」と言ってしまふ一人である。社会学者として問われたならそうは言わないかもしれないけれど、生活者としては、少なくとも心情的、感覺的に、「それはちよつと……」と思つてしまふ。

「それはちよつと……」と私が思うのは、そうした問題がこの社会を私たちが生きることを通じて生み出される「社会的な問題」であることが理解できないからではない。理解することはできる。だがそれは、私が今現にここでこの社会を生きていることと、どこか位相を異にしているように感じる。少なくとも、そのことについて真剣に考え、責任をもち、対処しなくとも私は日々の暮らしを送っていくことができる。そのような問題については政治家、行政担当者、研究者といったしかるべき専門家たちがいるのだから、日々の暮らしの中ではさしあたりそうした専門家たちに任せておけばよい。だから私は、職業的な研究者として私の専門領域にかかわる問題については問われたときには、私もまた専門家としての責任においてそれに答えるけれど、生活者としては必ずしもそうではないのである。

たとえて言えば、次のような感じである。今、人工衛星か宇宙ステーションにでも乗つて、宇宙空間から地球を見ているとしよう。そのとき、眼下あるいは頭上に浮かんだ地球の姿を見て美しいと思ひ、美しく見えるその地表で人びとが争うことや、環境を破壊しつつあることを、限りなく愚かでただちにコクフクすべきものだと強く思つてしまふかもしれない。実際、宇宙空間から地球を見て帰ってきた宇宙飛行士は、しばしばそういう内容の発言をする。そうした言葉を聞くと、私は何かとてもイゴコ⁽³⁾の悪い思いがする。地球を外側から見たとき、そのように感じてしまうのはわからなくもない。だがその一方で、ひとつたび地球の上に立つて日々の営みの中に身を置くと、この私にとってリアルなのは、目の前の具体的な他者との争いや対立であつたり、便利さや安楽や快楽であつたりすることだろう。どちらの感覚が正しいと云うことはできない。異なる場所、異なる視点に

立ったとき、世界は異なる様相をとって現われ、それに対する私やあなたの感覚や思考も異なるということであるにすぎない。

ここで指摘しておきたいのは、社会について考えるときのこの落差、外側から地球を見ることが地上に立って周囲を見ることが間に存在するようなこの落差こそが、社会という場をめぐるひとつの「社会的な」(4)の形であるということだ。人は

しばしば、そのような落差とともにある場所として社会を生きる。その落差がないふりをして「社会的な問題」について

(5) 考えようというのは、じつはそうした落差自体の社会性に目をつぶること、したがって本当には社会を見ていないということなのではないか？ 「正しい答え」には、正しきゆえの」(6)がある。「まっすぐに社会的な問題と向かいあう

人たち」から見ると屁理屈の言い訳のように聞こえるかもしれない。だが、これもまたまぎれもなく、現代における社会という(4)のひとつの形である。

ここでは、こうした落差の経験もひとつの焦点として、社会について考えてみよう。私たちがまぎれもなくその中を生きていながら、それとの間にどうしようもない落差や隔たりをとくに感じてしまう場所としての社会について、考えてみたいのだ。

なぜ社会について考えるのかという疑問に対する可能な別の答え方には、次のようなものもあるだろう。

「社会について考えることは役に立つから。」

では何の役に立つのか。商売の役に立つ。将来設計の役に立つ。損しないために役に立つ。ようするに、なんらかの意味で「役に立つこと」のために役に立つ。

金融制度について知り、考えることは経済活動や金融系企業への就職に役に立つかもしれない。少子高齢化について考えることは、自分の将来設計や新たな市場開拓のために役に立つだろう。都市問題について考えることは公務員になるために役立つかもしれないし、自分の暮らす地域の将来のために役に立つかもしれない。差別について考えることは、差別のないよりよい社会を作るために、あるいはまた自分自身が差別のある世界を生き抜いていくために役に立つだろう。社会について考えることは、しばしばいろいろな意味で社会生活上の役に立つ。これは間違いない。

私も、社会学者として自分が考え、言葉にしたものがなんらかの形で他の人びとの役に立てば嬉しいとは思う。だがしかし、私自身は何かの役に立つから社会について考えたり、それをめぐる言葉をつづったりしているわけではない。ではなぜ、別に誰から頼まれたというわけでもないのに、私は社会について考えているのだろうか。簡単に言えばそれは、社会について考え、何か明らかになってゆくことが、ある「喜び」の感覚を与えてくれるからだ。では、なぜ知ることが喜びなのか。それは、私がこの社会を生きるとはどのようなことなのか、人が社会を生きるということはどういうことか、私たちがそこで日常的に営んでいることや、そこで直面する問題が、どのような仕組みで存在しているのかを知ることが、「私」と「世界」についての視界をよりクリアにしてくれるからなのだ、と言えるかもしれない。

もちろん、いくら考えたからといって、これですべてわかったということは多分ない。孔子や古代ギリシアの時代から少なくとももう二五〇〇年くらいは、人間は世界や社会について学問として考えてきた。それでもわからないくらい、世界や社会も、そこを生きる人間も「わからなさ」に満ちていて、その「わからなさ」の中を、ときにその「わからなさ」を自覚しつつ、けれどもたいていはそうした「わからなさ」を取り立てて問うことなしに、「わかったこと」にして暮らしている。社会について考えることは、何かについてわかるより先に、まずはこの「わからなさ」に気づき、それについて問うことから始まる。そして、この「わからない」ということは、普通の意味では何の役にも立たないことだ。

たとえば、人はなぜ「神」という形も明確な(8)性ももたないものを作り出し、それを畏れ、それに従ってきたのか。そもそも「神」というものに具体的な事物のような(8)性がないのだとしたら、神を敬い、信じ、神に従うとき、人はいったい何を敬い、信じ、何に従っているのか。あるいはまた、人はなぜときに他の人間の命令や指示に嫌だと思いつつも従ってしまうことがあるのか。それ自体は紙切れや金属のメダルにすぎないカヘイが、なぜ価値あるものとして使用され、流通するのか。しかも、食べ物も衣服も、土地も、労働も、ジェットコースターに乗る楽しさや歌声まで、じつにさまざまに異なるものや出来事が、この紙切れや金属が示す価値で等しく計られ、売り買いされてしまうのはなぜなのか……などなど。

これらの「問い」には簡単に答えることはできないし、なんらかの答えにたどりついたとしても、その答えは多分、普通の意味で「役に立つ」答えてではない。にもかかわらず、そのような問いに気づくこと自体が、私たちの生きる社会や世界について知る、ひとつの知り方である。私たちが通常それとして問うことのないさまざまな営みや出来事が、さまざまな謎に満ちたものであることを知ること。それはひとつの驚きの経験である。そのとき、日常の風景は、それについて考えるに値するものとして現われてくるだろう。そして、その謎について考えることは、私が生きる世界や社会を、そしてまたそれを生きる私たちについて、より深い了解や認識に達するということだ。ちょうど山登りで苦しい坂道を過ぎ、頂上ではないけれども展望の開けた場所に出たときに、そこに広がる新たな視界に新鮮なおどろきを感じるような興奮と感動が、確かにそこにはある。

日常的な意味で「役に立つから考える」というのは、しばしばそうした「役に立つ」という目的のために、考えることの幅をとて狭くしてしまう。たとえば、この本の後のほうで「ひきこもり」について考えることになるのだが、「役に立つ」という点からひきこもりについて考えると、「ひきこもりをどう解決するか」とか、「ひきこもりもじつは役に立つ」といった話になってしまいうだろう。だが、ひきこもりについて考えられることは、それだけではない。「ひきこもり」と言われる現象もまた社会的な関係やつながりの形なのではないかとか、そもそもある状態が「ひきこもり」という言葉で (8) 化され、問題化されるのはどのような社会の仕組みによっているのかといった、普通の意味では役に立たないかもしれないが、それによって「ひきこもり」と呼ばれる出来事や現象についてより明晰な理解を与えてくれるかもしれない考え方、それによって「ひきこもり」という問題についての現在の考え方が霧のように消え失せるかもしれない、もしかしたらなんらかの役にも立つかもしれない考え方や問いの立て方が存在するのだ。

だが、社会について考えることは、ときに社会を「うつつ」と生きることを難しくすることもある。なぜならそれは、私たちが当たり前のものとして生きている考え方や役割、ルールといったものをときに否定したり、相対的なものにしたたりしてしまうからだ。

“うっとり生きる”というのは、自分がしていることや置かれている状況について取り立てて反省することなく、そこにすっぽり入り込んで楽しんだり、喜んだり、あるいは悲しんだりすることだ。ある状況や行為に「内在すること」と言ってもいい。

たとえば、多くの現代人にとって「恋愛」というものは、一定の年齢になればたいていの人が、「片思い」や「失恋」という形であれともかくも経験するもので、ごく自然な感情の表われであるということになっている。「いくつになっても恋愛したい」といった言葉を雑誌や新聞の紙面などで見ることがあるように、それは人間にとって本来的な感情の表われで一般に好ましいもので、できることなら素敵な恋愛をし、成就したいものと考えられている。だが、このように“自然”な感情である恋愛が、じつは特定の時代の特定の社会でのみ“自然”と考えられている感情であるとしたらどうだろう。恋愛も友情も、親子の情といった感情も“自然”な感情などではなく、社会の中で形作られた感情の形であるというのは、現代の社会学や歴史学ではすでに常識になっている。“恋愛する”とは、そのように社会的に作られた感情のイガタの中に自分の感情を流し込み、意味づけ、あたかもそれが“自然”であるかのように生きることにはかならないとしたら、あなたはもう恋愛という関係を“うっとり生きる”ことはできなくなるかもしれない。もちろん、「社会について考えること」と「社会を生きること」とはさしあたり別ではある。だが、「社会を生きることについて考える」⁽¹¹⁾という部分を自分の中にもったとき、人はつねにどこかで自分や、自分の生きる社会について反省的に考えるイキをもつことで、実際に生きることに対する距離や落差を感じ続けることになるだろう。

だが、この“うっとりできなくなる”は、ときに人を自由にする。社会というのはなかなか巧妙なもので、ときに理不尽なことを“正しいこと”であるかのように見せる仕組みをもっている。暴力的な親や配偶者に従うことを「孝行」や「愛情」だと思ってしまうこと。自分に責任のない差別や不利益を、自分の能力や運のなさによるものだと思ってしまうこと。社会について考えることは、そうした理不尽さから人を目覚めさせる可能性をもっている。そしてまた、そのような理不尽さとは異なる関係の可能性を考える力を与えてくれるかもしれない。

(若林幹夫『社会学入門 一步前』による)

注 孔子……古代中国の思想家

〔問一〕 傍線(2)(3)(9)(10)(11)のカタカナを漢字に改め楷書で正確に書きなさい。

- (2) コクフク
- (3) イゴコチ
- (9) カヘイ
- (10) イガタ
- (11) ケイキ

〔問二〕 傍線(1)にいう「腑に落ちる」と同じ意味の表現を「がいく」という形で示すとき、空欄に入るもつとも適当

な語を漢字二字で答えなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問三〕 傍線(7)にいう「そうした〃わからなさ〃を取り立てて問うことなしに、〃わかったこと〃にして暮らしている」と同じ

趣旨の表現を本文中から探し出し、十字以内で答えなさい。(句読点、引用符は一字に数えない)

〔問四〕 空欄(4)(5)(6)(8)に入れるのもつとも適当な語句をA～Eの中からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

(4)				
E	D	C	B	A
経験	関心	価値	問題	責任
(5)				
E	D	C	B	A
生活者として	専門家として	我がこととして	自明のこととして	外面的なこととして
(6)				
E	D	C	B	A
こだわり	わな	潔さ	理屈	意義
(8)				
E	D	C	B	A
抽象	対象	内容	目的	志向

〔問五〕 次のア、オのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものはA、合致していないものをBの符号で答えなさい。

ア 宇宙飛行士が地球を外側から見るように、私たちは社会を外側から見ると視点を持つことが大切だ。

イ 社会の仕組みを自然であると信じて生きるとは、ときに不自由な運命を甘受することでもある。

ウ 社会について考えることが研究に値するのは、それが実際の社会生活に役立たないからである。

エ 私たちは社会の中の「わからなさ」に気づくことで、世界をよりよく理解する可能性を手に入れる。

オ 私たち一人一人が正しい答えを見つけだし、社会的な問題の落差や隔たりを改善しなければならぬ。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(25点)

「社会保障」とは Social Security を訳したものであるが、このでの保障 security の語源は、ラテン語の「SE = without, CURA = care」といふことである。 「ウィズアウト・ケア」、つまり「ケアがないこと」という意味であるが、ここでの「ケア」は現在日本語でもよく使われるようになった「世話、ハイリヨ」¹⁾といった意味でのケアではなく、むしろその原義としての「悩み、心配、憂い」という意味である。したがって、security とは、「悩み、憂いがないこと」を表していることになる。人間が人間である以上、「悩みがない状態」などということは、およそありえないとも考えられるが、「社会・保障 (social security)」の場合には、それに「社会」がついている。つまり、²⁾「社会的な(あるいは、社会的な原因から発する)悩みがない状態」を実現するのが、社会保障の目的、ということになる。考えてみれば、人間の悩みには、たとえば失恋、といった例のように、基本的にほぼまった個人と個人との関係に関わるものから、その国の制度や社会経済的な状況にむしろ原因をもつようなものまで、様々にある。前者については、人間が存在する以上、なくなるということはないだろうけれども、後者については、それができる限り生じないようにすることは、不可能ではないだろう。それが「社会的な悩み」をなくすものとしての社会保障、という言葉に本来こめられた意味であったはずである。

しかも、少し考えてみると、「個人的な悩み」と「社会的な悩み」というのは、そう単純に線が引けるものではない。例えば高齢者の介護問題を考えてみよう。それをあくまで個人や家族の内部に完結した、あくまでプライベートに対応されるべき問題ととらえるか、「社会的」な制度として対応が図られるべき問題、悩みと理解するかは、時代や人々の意識のあり方によって大きく異なってくる。ここに、一見たんなる乾いたシステムに映る「社会保障」という制度のもつ、奥ゆきやダイナミックな広がりが存在する、と言えるのではないだろうか。そして、本書の主題はまさにこうした社会保障というシステムの現在そして未来のありようなのである。

少し視点を現実的な場面に移してみよう。現在わが国においても、社会保障をめぐる議論は、高齢化の急速な進展、経済の構

造的な低成長といった状況のなかで、実に活発なものとなってきた。将来の年金は本当にもらえるのか、医療費の負担は今後どうなるのか、介護保険制度は大丈夫なのか、等々といった議論や課題である。しかし、現在の議論の状況を見ると、いわば医療、年金、福祉といった、社会保障の個別の分野がタテワリ的に論じられ、しかもそれらの多くが当面の財政難をどうしのぐか、といった対症療法的な議論に終始しているため、将来の全体的なビジョンが見えず、かえって国民の間に大きな不安が広がっているように思われる。言い換えると、今後の長期的な生活設計を立てるにあたって、「どこまでは」公的な保障を想定してよく、どこからは自らが個人の責任において対処すべき領域であるのか、その全体的な展望が見えない、というのが現在の日本の状況なのである。

ここで「リスク」というコンセプトが重要なものとして浮かび上がる。すなわち、これからの日本は、ある意味で「リスク社会」とでも呼べるような時代になりつつあるのである。これはどういうことかと言うと、戦後から最近までの高度成長時代は、ともかく経済のパイが大きくなり続け、それに応じて物質的な豊かさも生活スタイルも予測できないほどのスピードで変化していったから、いわば「未知の、かつ無限の未来」に向けてがむしゃらに突っ走っていけばよかったのであり、「リスク」といったことを考える暇もなく、またその必要もなかった。しかし現在のように物質的な豊かさがホウワ⁽³⁾し始め、経済がセイジユク期⁽⁴⁾ないし安定期に入ってくると、これまでとは大きく異なつて、「長期的な将来」を予測することが可能となり、また必要にもなってくる。つまり、これまで以上に、「長期的な生活設計」というものを作ることが可能な時代に現在の日本はなりつつあるのであり、逆に言えば、そうした生活設計を立てることの「必要性」もまた大きくなつてきているのである。

こうした時代の変化をダイレクトに感じさせられるのは、実は大学で学生たちに接しているときである。私は三年ほど前から大学で社会保障を教えているが、最初にまず驚いたのは、現在の二十歳前後の若者たちが、自分がそうであった頃^{ころ}と比較して、はるかに「老後」のことや「年金がもらえそうか」といったことに関心をもっている、ということだった（もちろん個人差はあるけれど）。私などの世代はおそらく過渡期なのだと思うが、学生運動華やかなりし頃の学生の誰が「生活の長期的な安定」や「老後の安心」に大きな関心を払っただろう。これが時代の変化というものであり、「豊かさ」のひとつの帰結なのである。

そこで、だからこそ「リスク」というコンセプトが重要になってくる。なぜなら、「安心・安定・安全」ということは、言い換えれば「(様々な) リスクに対する備えができていくこと」に他ならないからである。そして、このことはまさに先にふれた「保障＝心配事(ケア)がないこと」という点に重なり合うのである(ここで若干補足すると、私はこうした意味で「リスク」概念の重要性はツウカン⁽⁵⁾しつつ、しかしなおそれはどうしても「消極的」なものにとどまっております、最終的には、今後の社会についてより積極的なビジョンを構想していくべきものと考えている)。

ともあれこのように考えていくと、「社会保障」というものの意味がもう一度新しいかたちで見えてくる。いま述べたように現代とは「リスク社会」であるが、リスクのなかには、個人あるいは「市場」(私的保険を含む)で対応(リスク・ヘッジ)できるものと、何らかの理由で、個人や市場では対応が困難で、社会的ないし公的な制度として対応が行われるべきものがある。後者に相当するのが、まさに「社会保障」ということになる。

ここで当然問題となるのは、ではいったいどのような「リスク」は個人ないし市場で対応されるべきで、どのようなものは公的になされるべきか、という整理であり、すなわち「(生活) 保障」⁽⁶⁾についての「公私の役割分担」ということである。

こうした視点で見ると、再び現在の日本における社会保障についての議論は、あまりにも表層的であることをツウカン⁽⁵⁾せざるを得ない。現在政府の審議会などで様々な議論が行われているが、医療保険は医療保険、年金は年金、という具合に、医療、福祉、年金等といった社会保障の個別分野がバラバラに論じられ、全体としてどのような社会保障の姿を選ぶのか、という議論やビジョンがほぼ不在の状況となっている。私なども時折話す機会があるが、各地で自治体や企業などが主催する「生活防衛講座」のようなものに、四十〜五十代前後の主婦層等を中心に多くの人が殺到する背景にはこうした点があると思われる。

これには政治や政党の姿勢も関係していると思われるが、いずれにしても、いま何よりも必要なのは、社会保障の全体を視野に入れた上で、医療、年金、福祉といった各分野における真に望ましい「公私の役割分担」⁽⁶⁾の姿を明らかにし、それらを踏まえて、これから選ぶべき社会保障の全体像に関わる基本的な選択肢を設定し、議論を深め、選びとっていく、という作業に他ならない。

このような問題意識に立った上で、特に次の三つの点に留意しながら議論を展開していきたい。

第一は、「原理に遡^{さかのぼ}った考察」ということである。社会保障の問題は、考えていくと、自ずと「公平、平等とは何をもって言えるか」、「個人の生活の保障において、国家が果たすべき役割はどこまでか」といった、哲学的とも言えるテーマに行き着かざるをえない。幸か不幸か、経済成長による「パイの拡大」が当然の状況であった戦後の日本においては、パイの拡大自体が多くを解決してくれたため、こうした問題を考えなくともそれなりに対応できた。しかし経済が構造的な低成長期に入り、また高齢化が急速に進むなかで、富の「再分配」のあり方、つまり「所与のパイをどう分けるか」が前面に問われるこれからの時代においては、こうした原理原則に立ち返った議論をしなければ、事態は収拾のつかないフンキユウ⁽⁷⁾に陥るか、さもなくばひたすら問題を先送りして将来世代に赤字やツケを回す、といったことになりかねない（その兆しは既に現れている、とも言える）。だからこそ、対症療法的でない、原理に遡^{さかのぼ}った考察が何よりも必要なのである。

第二は、「社会保障と経済とのダイナミックな関係」への着目である。社会保障という制度は、一見すると、ほとんど不動の、いわば「静的な」制度として存在しているかのようにも見える。しかし、例えば社会保障の「財源」をどう確保するか、という点ひとつを考えてもわかるように、社会保障はそれ自体として空中に浮かんでいるような存在ではなく、経済というものと不可分の関係にあるものである。しかも、それは「経済」の側から見ても「負担」として存在する、というものではなく、相互に補完し合いながら、歴史的に「進化」していくような存在である。本書では、いずれにしても、社会保障制度だけを他と切り離して見るのではなく、こうした社会保障と経済との動的な関係という視点を基本に置いて考えていきたいと思う。

第三は、「グローバルな視点」である。通常、社会保障とは、当然のように、一国内で完結する、いわばドメスティック（国内的）な制度と考えられている。これは無理のないことで、社会保障という制度、あるいは「福祉国家」というシステムは、「国民国家」の生成・発展ということと軌を一にするかたちで展開してきた。ところが、経済のグローバル化のなかで、こうした一国内で完結型の社会保障イメージは、既に維持しがたい局面を迎えつつあり、例えばEUにおいてはそれは現実の課題となってきた。

注　パイ……分割できる利益・費用の総体

〔問一〕　傍線(1)(3)(4)(5)(7)のカタカナを漢字に改め楷書で正確に書きなさい。

- (1) ハイリヨ　　(3) ホウワ　　(4) セイジユク　　(5) ツウカン　　(7) フンキユウ

〔問二〕　傍線(2)にいう「社会的な(あるいは、社会的な原因から発する)悩みがない状態」について本文の筆者の考え方に合致しているものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A　失恋したが新しい恋人が見つかり楽しい時間を一緒に過ごしている状態
B　高齢者を家族一同で介護している状態
C　人間の存在や関係というプライベートな問題が解決された状態
D　モノを自由に買えるお金が手に入った状態
E　国や自治体の制度が有効に機能している状態

〔問三〕 傍線(6)にいう「公私の役割分担」について、本文の筆者の考え方と合致しているものはA、合致していないものをBの符号で答えなさい。

ア 医療保険は充実しており役割分担が十分なされている典型的な例である。

イ 「生活防衛講座」に人々が殺到するのは役割分担が十分でないからだ。

ウ 日本では経済の構造が変化した役割分担は十分になされている。

エ 各省庁が分野別に役割分担を果たしている状態を維持すべきだ。

オ 役割分担の議論をするよりも社会保障の給付をもっと増やすべきだ。

〔問四〕 本文の筆者によれば、「社会保障」が対象とするリスクとはどのようなものか。もっとも適当な表現を本文中から探し出し、四十字以内で答えなさい。(句読点、引用符も一字に数える)

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(25点)

「どうなっているのか」という実態探しの問いに対して、考えることが要求される問いのかたちがあります。「なぜ？」という問いです。というのも、「なぜ」という問いかけは、正解探しの発想ではなかなか答えが得られない問いのかたちだからです。「なぜ」という問いがさらなる考えを誘発するのは、その答え、「なぜなら……」についての予想や見込みを、とりあえず調べてみることで自体に意味があるからです。もちろん、この「なぜ」に対して、「なぜなら……」という見込みがどれだけ正しいのか、最終的には調べてみて確かめることが必要です。しかし、その前にその答えについて、自分なりの想像をはたらかせてみることで、つまり、原因を探ってみることは、「どうなっているのか」を問題とする場合以上に、深く考えることにつながっていく可能性があるので。少し難しいことばを使えば、このような予測は、因果関係(原因と結果のつながり)についての⁽¹⁾カセツ(見込みや予想)を立てることに他なりません。

たとえば、「中学生の塾通いはどうなっているのか」という問いは、「どうなっている」のところを、時間や費用、⁽²⁾ヒンドと⁽³⁾いった部分に分けて、問いのブレイクダウンをしてみても、結局はそれぞれについて調べなければ、いくら勝手な想像をはたらかせたところで、そうした予想にもとづく議論はあまり意味を持ちません。それに対し、「なぜ中学生の塾通いは増えているのか」という「なぜ」という問いの場合には、その理由や原因を予想すること自体、私たちの考えを深めるきっかけとなります。想像力を⁽³⁾クシして、「なぜ」の答えを考えたり、仲間と議論することは、解答にさまざまな可能性があるだけに、「どうなっているのか」を勝手に予測する場合以上に、考える力をはたらかせることになるのです。

もちろん、この場合にも、「なぜなら、受験競争が激しくなったからだ」といった、ありきたりの解答を与えて満足してしまうのであれば、考えを深めることにはつながらないでしょう。「常識」の⁽⁴⁾罫(わな)にまんまとはまって、思考停止に陥ってしまうからです。それでは⁽⁴⁾複眼思考(ふくがんしこう)につながりません。

そこで、この「なぜ」を⁽⁴⁾上手(じょうず)に展開していくことが、新しい問いの発見につながっていくのです。「なぜ中学生の塾通いは増

えているのか」を出発点に、さまざまな「なぜ」の (5) を発見していく。そうすることで、最初の問題にいろいろな角度から、アプローチしていくことが可能になります。

たとえば、「中学生の塾通いはなぜ増えているのか」という問いに、ひとまず「なぜなら、受験競争が激しくなったからだ」という解答を与えたとします。このままでは、「ああ、やっぱり受験教育のせいね」といった常識的解答にとどまるでしょう。

そこでさらに、「本当に受験競争は激しくなっているのか」という、これ自体はへ (6) を問う／＼問いを投げかけてみます。この問いは、常識となっている前提を疑う問いになっています。

この問いに対して、「そりゃ、そうに決まっている」と思う人がいるでしょう。少なくともしばらく前までは、年々受験競争が激しくなっているというのは、私たちの常識的な見かたの一部になっていたからです。けれども、このようなステレオタイプの解答に出会ったときこそ、要注意です。問いの展開が有効にはたらくのは、このような「常識的解答」に巻き込まれそうになったときなのです。このような場面で、「本当に受験競争は激しくなっているのか」と、問いを少しずらして考えてみることで、常識にはまって思考停止に陥らない、考えの (7) 筋道が見えてきます。

「受験競争が激しくなる」というのは、どういうことか。入試の競争率が高くなることか。それとも、受験競争に参加する人の数が増えたことか。あるいは、そのいずれでもなく、世の中全体が何となく思っていることなのか。このように問いを少しずらしてみるだけでも、問題の切り口が複数になり、広がっていきます。そして、常識的に思われているほど、「本当に受験競争は激しくなっているのか、どうか」に答えることが容易でないことがわかるでしょう。実際のところ、「五年前、一〇年前に比べて、本当に受験競争が激しくなった証拠はどこにあるのか」を考えてみると、その答えが「イエス」だとカクシン⁽⁸⁾を持って答えられる人は、それほど多くないはず。厳密な根拠を知らなくても、何となく、そう思い込んでいる人のほうが多いのです。そうだとすれば、このような説明は、もつともらしくは聞こえるものの、実際には事実には照らすことのない、あるいは照らすことのできない根拠にもとづく説明だということになるでしょう。世間の常識にとらわれてしまうとは、こういうことなのです。もつとも、少子化のせいで大学入試がやさしくなったという事実がたびたび報道されるようになったために、最近ではこういう

常識も薄れており、それにとらわれることは少なくなっているでしょう。

さて、話をもとにもどして、もし、このように考えて、受験競争が激しくなったからだという説明が不十分だということになれば、それとは別の原因を考えなければならぬでしょう。たとえば、「社会全体が豊かになったおかげで、塾に子どもを通わせることのできる家庭が増え、その結果、通塾率が高まったのだ」という説明はどうでしょうか。受験競争が激しくなったことが直接の原因ではなく、各家庭の収入が増えたことが通塾率の上昇の原因だと見るのです。

この説明も、常識的に見えるかもしれませんが、この場合には、家庭の教育費支出のスイイ(9)を実際に調べることでできます。したがって、先ほどの「受験競争が激しくなったからだ」という説明に比べれば、根拠を確かめることのできる説明といえるでしょう。さらには、この説明の応用として、「子どもの数が減ってきたので、子どもひとり当たりにかけられる教育費が増えた結果、塾に子どもをやる家庭が増えたのだ」という説明も可能です。この場合には、子どもの出生数の変化と、一家庭当たりの平均教育費支出の関係を調べていくことで、原因と結果の關係にまで目を向けることができるでしょう。いずれにしても、「受験競争が激しくなったからだ」という、事実を照らすことのない印象にもとづく説明にとらわれずに、原因を追究していくことが重要なのです。

これまでは塾に行く側から問題を見てきました。それでは、これを塾の側から見たら、「なぜ」の (5) をどのように作り出すことができるでしょうか。どんなに子どもが塾に行きたいと思っても、近くに塾がなければ行くことはできません。そこで、こうした需要に対して、どれだけの塾の供給が可能かを考えてみると、最初の「なぜ中学生の塾通いは増えているのか」という問いは、「なぜこれだけ塾が増えたのか（塾の数が増えれば、塾に行くチャンスも増えるので、塾に行く子どもも増えると考ええる）」あるいは「なぜ塾の大規模化が起きたのか（塾の数が増えなくても、ひとつの塾の規模が大きくなれば、塾に行く子どもも増えるから）」という別の「なぜ」という問いに立て直すことができるでしょう。「なぜこれだけ塾が増えたのか」というなぜは、「なぜこれだけ塾が増えたのに、つぶれずにやっていけるのか」という問いの裏返しであると見ることもできるでしょう。「塾の大規模化が起きたのはなぜか」という問いも、大規模化するためには、塾には何が必要か、という問いを派生させる

ことになります。

こうした塾側の「なぜ」や「どうやって」に対して、他の商品市場と同じように、受験産業においても、広告をはじめとするマーケティング技術が改善されて市場が開拓されたからだとか、塾の経営が企業化してより多くの顧客にアピールできるサービスや商品の開発（たとえば、新しい指導方法や教材の開発など）がなされるようになったからだという解答を得たとします。この場合、「受験競争の激化」とはかかわりなく、塾の側の顧客へのはたらきかけがうまくなって、市場が拡大したという説明ができるわけです。

もちろん、ここで展開した例は、まだ「見込み」や「予想」であって、事実によって確認されたものではありません。それでも、最初の「なぜ」という問いから出発して、次々と、新しい「なぜ」や「どうして」「どうなっているか」という問いの(5)を生み出すことができました。それによって、「受験競争が激しくなったからだ」という常識にはとらわれない別の見かたを発見することができるようになったのです。

このように、「なぜ」という問いを基点にして、新しい問いを発見していく。これらの新しい問いの中には、最初の問いとは別の側面から問題を見る視点が含まれていることが少なくありません。つまり、ちよつと問いをずらしてみることで、最初の問題を真つ正面から見ているだけでは見えてこない側面をとらえる、もうひとつの視点、すなわち、複眼が見つかるのです。

（刈谷剛彦『知的複眼思考法』による）

〔問一〕 傍線(1)(2)(3)(8)(9)のカタカナを漢字に改め楷書で正確に書きなさい。

- (1) カセツ (2) ヒンド (3) クシ (8) カクシン (9) スイイ

〔問二〕 空欄(5)(6)(7)に入れるのにもっとも適当な語をA～Eの中からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

(5)

E	D	C	B	A
意味	由来	根拠	重複	連鎖

(6)

E	D	C	B	A
論理	予想	実態	原因	理由

(7)

E	D	C	B	A
細い	詳しい	珍しい	新しい	古い

〔問三〕 本文中の「なぜ」という問いの内容の説明として、筆者の考え方と合致しているものはA、合致していないものをBの符号で答えなさい。

ア 理由について考えてみることで自体に意味がある問いである。

イ 常識の異にとらわれてしまう可能性がある問いである。

ウ 事実について詳しく調べ、正しい知識を調べるための問いである。

エ ありきたりの解答を与えるような問いである。

オ 考えを深め、新しい問いを発見できる問いである。

〔問四〕 傍線(4)にいう「複眼思考」と同じ意味を表す語句を本文中より探し出し、十五字以内で答えなさい。(句読点、引用符は一字に数えない)

〔問五〕 次のア～オのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものはA、合致していないものをBの符号で答えなさい。

ア 仲間と議論することは、どうなっているのかということを手探りに予測することである。

イ ステレオタイプの解答に出会ったときに常識的なものの考え方の重要性がわかる。

ウ 常識にとらわれたり、ひとつの視点しか持たなくても、新しい問いの発見は可能である。

エ 思考停止に陥らないように、なぜという問いによってさまざまな可能性を考える必要がある。

オ 正しい事実がわからなければ、理由や原因を予想する問いを立てる意味はない。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(25点)

『陰翳礼讃』^{いんえいらいざん}は、二千字前後の断章を十数編、全体で文庫本五〇ページにも満たないほどのエッセイで、特に目立った構成もなく、いかにも思いつくまま、気楽に座談をくりひろげていくといった趣きの読み物である。谷崎が日頃身边で経験している日本人の暮らしの特徴をさまざまな角度から論じていって、つまるところ、その要諦^{てい}が陰翳というものにあると焦点を絞っていくわけだが、話は、まず、近頃、家を建てた時の苦勞から始まる。

伝統的日本人屋の味わいを生かしたいと思うのだが、一方では、実用の便を考えて外来の近代的諸設備を取り入れざるをえない、ところが、このふたつがなかなか調和しない、なかでも、とりわけ難しかったのが便所であるという。

谷崎には、『陰翳礼讃』と同時期に『厠のいろいろ』^{かわや}という独立したエッセイがあり、やはり、あれこれ、笑い話のようなものまでふくめて、便所について、文字通り「うんちく」¹⁾を傾けているが、『陰翳礼讃』では、その要所が紹介される。関西の寺院の昔風の便所で用をたすと、実に精神が休まる。そうした便所は、静かな植え込みの陰に設けられて、薄暗く、しゃがむと、あたりの緑の様子、しとしと降る雨の音、虫の音、鳥の声などに、しみじみと風雅の気分を味わうことができる。本来からいえば不浄の場所が風流な、詩的な場所に変わってしまったのであり、ここに日本人独特の工夫がある。西洋で、便所がただ不浄物を処理するという実用的用途からのみ考えられているのとは大違いである。ところが、一般家庭の便所となると、伝統的風雅の工夫は理想であっても、実際面からいうと、やはり、衛生上、西洋式トイレ^{トイレ}貼り、水洗という味気ないものになってしまう。それになんとか伝統日本式の雅致を加味したいが、どうもうまくいかない。

そこから、谷崎は、文明と科学の相性という問題に移って、そもそも、こうした苦勞が生じてくるのは、もともと西洋文明から生まれ、西洋文明の質に合致するように発達してきた科学技術の産物を、西洋とは異質な日本(東洋)文明にもちこんだからであって、もし、日本(東洋)文明自体から科学技術が生まれてきたなら、当然、それは、西洋型とは肌合いを異にするものとなり、違和感も生じなかつただろうと論じる。

家造りの苦勞話、それも、特に、便所のスタイルというきわめて身近な話から始まったのが、一転して、壮大な比較文明論に飛躍するこの論法は、論理としてはずいぶん乱暴だが、谷崎本人は、そんなことは一向気にかける様子もなく、ごく自然な、当たり前前の話として悠々と語りつづけ、それにつられるように読む側も納得してしまふ。暮らした実感に即して（『枕草子』的）、実感のうながすままに考察を發展させていく（『徒然草』的）随筆風議論といえるが、『陰翳礼讃』は、こうした論法で終始展開されていく。

さて、以上のような前置きを経て、いよいよ本論に入り、日本（東洋）文化の基本特質である陰翳というものが語られていくわけだが、まず、その手近な例として、紙でも食器でも宝石でも、西洋ではまじりけのない、ぴかぴかに輝くようなものがよくとされるのに対して、われわれは、むしろ、一種濁りを帯び、沈んだ翳りのあるものを好む、長年の風雨や手垢などによってくすんだ肌合いに雅致を感じる、気持ちが悪まると述べられる。

ついで、少し角度を変えて、闇の効果というものが論じられる。京都のある料理屋では、最近まで、電灯を使わず、燭台を使っていたが、その弱々しい明かりのおかげで、膳や椀などの漆器の肌合いが深々と厚みを帯びたものに感じられた、漆器の黒々とした肌のうえにほどこされた蒔絵の金なども、暗がりにゆらめく灯火を反射してそぞろ怪しい気配を放ち、「夜そのものに蒔絵をしたような綾を織り出す」、そして、そういう闇の中で吸い物椀を手にもつと、まるで「生まれたての赤ん坊のぶよぶよした肉体を支えたような」生温かい温みを感じ、ほんやりと闇の中に沈んだままその中身を口にふくもうとする時、「一種の神秘であり、禅味であるとも云えなくはない」味わいをおぼえる、さらには、椀がかすかにジイと鳴っている、遠い虫の音のような音を耳にして松風を聴くような三昧境、瞑想の境地に近づく、それもこれも燭台のかすかな明かりによってひきたてられる闇の効果によるというのである。

このあたりの記述は、引用した表現にもうかがわれるように、小説家谷崎の感覚性豊かな描写力を存分にふるって、燭台の灯にほんやり照らされた部屋にうづくまるようにして吸い物椀を味わう、その五感を総動員した全身的感觉がまさまさと体験されるような迫真の場面となっている。文人文化論の真骨頂といつてよいだろう。

この闇の主題は、また後に本格的に論じられるが、ひとまず、話題は日本家屋のありかたに転じて、その第一の特徴として庇の深いことがとりあげられる。谷崎は、これを、元来は雨風を防ぐという実用的目的からきたものであるにせよ、やがて、そうした実用性よりは、むしろ、そこから生まれる美的効果が重視されるようになり、日本人の美意識に大きくかわるものとなってきたと説く。この深い庇に遮られることによって、日の光はざらざらした直射光線から鈍い間接光線に変わり、さらに、障子に濾過されて一層弱々しく、しかし、しんみり落ちていた明かりとなつて、それが簡素な室内の地味な砂壁に映ると、そこに、きわめて淡く、微妙な濃淡、陰翳が生まれる。とりわけ床の間にいたつて、この陰翳はきわまり、その凹みに朦朧と澱むようにあらわれる暗がりこそは「東洋の神秘」そのものにほかならない。そして、部屋全体を満たすもやもやとした「夢のような明るさ」の中で現実と非現実の境もあやしくなり、時の経過もおぼつかなくなる。これを、日本人は (3) と呼んで尊んできたのである。

それから、また、闇の主題が戻ってくる。かつての日本人は金襴とか金屏風のように金を室内装飾として多用したが、それは、光線の乏しい暗がりにおいて金がわずかな光を照り返し、そこに幻惑的な効果が生まれることを計算してのことだった。白日の下では、ただげげばしいとしか見えないものが、闇の中において、初めて、その真価を発揮するのである。つまり、金色の魅力とは、それ自体、それ単独ではなく、闇との対比、調和によって生まれるものなのだ。こうした取りあわせによる美は、能における装束と身体についてもいえる。谷崎は能を見にいくたびに、能役者のわずかに垣間見える手や顔の異様なまでの美しさに感嘆するが、それは、ごく当たり前の手や顔が能装束の凝った色合いと照り映え、それが舞台全体を包む闇の中に浮かびあがってくるという演出の結果にほかならない。そして、こういう美しさは、実は、能が生まれた戦国から桃山の頃の武士の暮らしそのものに日常的に見られたはずだった。いうまでもなく、その要諦は闇である。

(中略)

『陰翳礼讃』前半において、谷崎は、日本の陰翳文化の独自性をひきたてるために、しばしば、西洋文化を、なんでも白日の下にむきだしでさらすような文化として強調することが多かった。ところが、結びにいたつて、現代日本がこうした陰翳文化を

失ってしまったことを嘆く部分では、ヨーロッパから帰ってきた知人の話として、パリなどの方が東京などよりむしろよほど暗い、ランプを灯ともしている家もある、日本はアメリカのまねでこんなにあたらに電気照明を浪費する国となってしまったという観察を行っている。

この後者の観察に照らしているのなら、前者で谷崎が西洋といていたのはアメリカということになる。大正期、もっぱらアメリカの風俗文化に入れあげていたモダンボーイ谷崎にとって西洋とはすなわちアメリカであり、この大ざっぱな図式を『陰翳礼讃』にももちこんで日本の陰翳文化のひきたて役としたのである。ところが、実は、同じ西洋といっても、ヨーロッパなどは、アメリカとはずいぶん異質で、むしろ陰翳の文化に通じるものをもっている。パリのど真ん中で電灯ではなくランプを灯すのは、あえて、そのほの暗い光をめぐるからであり、室内照明として、ほとんど間接照明を用いるのも同じである。あるいは、幾重にも闇を塗り込めたような画面のところどころにはほのかに黄金の輝きが浮かびあがってくるようなレンブラントの絵などは、まさに、『陰翳礼讃』で闇の中の蒔絵や能装束の効果として語られていたものと瓜うり一つではないか。

ということとは、陰翳の文化は、必ずしも、日本（東洋）の専有物というわけではなく、より普遍的なものだということになる。そのうえで、なお、日本的な陰翳の特性というものがあるとすれば、その鍵かぎは、胴体のない文楽人形を例として谷崎が説いたように、陰翳なり闇なりの本体を探っていくと、実は、そこには何も無い、ただの空虚であるということにありそうである。ヨーロッパの陰翳なり闇なりが、レンブラントの絵のように、その奥に、底深い実体的なものを秘めていると感ぜられるのとの違いであり、それを突き詰めていくと、世界の中心としての仏教的無あるいは老荘的虚とキリスト教的な神なり実在なりとの差というようなことにも通じていくかもしれない。『茶の本』で天心が説いた空、虚、相对性等の理念にも、当然、照応するだろう。

一方、また、日本的といっても、この陰翳の文化は、やはり、すぐれて関西の古典趣味的な文化であり、たとえば、もともと谷崎が生まれ育ち、初期の『刺青しせい』などに発揮した江戸下町風「いき」の文化などは対照的なものである。九鬼周造の『いき』の構造』と照らしあわせてみれば、それは一目瞭然りょうぜんだろう。「いき」が、たとえば浮世絵の美人画でほつれ毛の一本一本ま

ですっきりと細筆で描きわけていくように、鮮明さの美意識であるのに対し、陰翳は、まさにその対極にある、「いき」が最も嫌うといえる曖昧さ^{あいまい}、ぼかしの美学にはかなならない。さらに、「いき」が潔癖なまでに自他を峻別^{しゅんべつ}し、頑として他に融合されることを拒んで己を貫こうとする倫理性を旨としているのに対し、陰翳は、そうした倫理性、自意識をいともたやすく呑み込み、無化して、己と他者、人間と自然、現実と非現実の区別もつかない無倫理、無意識の世界にひきずりこむ。

こうして、同じ伝統日本文化といえながら、「いき」と陰翳は極端な対照を見せる。この対照の意味が何なのか、谷崎が「いき」から陰翳に転換した意味は何なのか、西洋と日本（東洋）の陰翳の関係同様、大きな問題といえる。

しかし、谷崎自身は、あくまで、自分で体感できる具体的な事柄に固執して、そうした抽象的議論には入らず、もっぱら、日本人の身の回りにたちこめていた、そして、今や急速に失われつつある陰翳なり闇なりの手触り、匂い、味わいを言葉で生け捕りにし、伝えることを第一とするのである。

（大久保喬樹『日本文化論の系譜』による）

注 レンブランド……十七世紀のオランダの画家、版画家

天心（岡倉天心）……明治時代の美術行政家、美術教育者、美術史家

老荘……古代中国の思想家の老子と荘子、根源的虚無と無為自然を説く

〔問一〕 『陰翳礼讃』の作者の著した代表的な小説を一つ答えなさい。ただし『刺青』を除く。

〔問二〕 傍線(1)にいう「うんちく」はなぜひらがなで表記されているのか、その理由を述べた次の文章の空欄(ア)、(イ)、(ウ)に入れるのにもっとも適当なものを左の中からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

(ア) を意味する蘊蓄うんちくと、「便所」に縁がある (イ) との (ウ) ので、その二つの言葉をかけたためである。

- | | | |
|-----|--------------|--|
| (ア) | | |
| A | 身につけた深い学問や知識 | |
| B | 物事のあるべきすじみち | |
| C | 現実に存在している事柄 | |
-
- | | | |
|-----|-------|--|
| (イ) | | |
| A | 風水の異称 | |
| B | 器具の通称 | |
| C | 大便の俗称 | |
-
- | | | |
|-----|---------|--|
| (ウ) | | |
| A | 音が似ている | |
| B | 意味が重なる | |
| C | 原義が一致する | |

〔問三〕 傍線(2)にいう「感覺性豊かな描写力を存分にふるって」と同じ趣旨の語句を本文中より探し出し、十五字以内で答えなさい。(句読点、引用符も一字に数える)

〔問四〕 空欄(3)には日本の伝統的美意識を表す語が入る。漢字二字で答えなさい。

〔問五〕 次のア～オのうち、筆者が紹介した谷崎の考え方と合致しているものはA、合致していないものをBの符号で答えなさい。

- ア 美は物体にあるのではなく、物体と物体との作り出す陰翳のあや、明暗にある。
- イ 日本人は真つ暗闇を恐れるから灯火を部屋に置いておくのがよい。
- ウ 「闇」を条件にいれなければ、漆器の美しさは考えられない。
- エ 陰翳文化の根源には、仏教的な無、老荘的な虚が存在すると認識していた。
- オ レンブラントの絵が西洋にも陰翳文化があったことを証明している。